

市勢発展の歩み

【歴史】

鎌倉は、相模湾に面した温暖な土地であったため、早くから人々が住みついでいました。古くは、旧石器時代の石器が大船地域から発見されており、縄文時代や弥生時代の遺跡も各地で確認されています。さらに、采女塚からは埴輪が出土しており、横穴古墳も数多く発見されています。

一方、鎌倉という名の由来には諸説があり、明らかではありませんが、「古事記」(712年)の景行天皇の条に「鎌倉之別」とあり、初めて鎌倉という名が見られます。その他、綾瀬市の宮久保遺跡から出土した天平五年銘(733年)のある木管には「鎌倉郡鎌倉郷鎌倉里」の記述があることから、奈良時代当初には行政単位としての「鎌倉郡」が成立していたと思われます。また、「万葉集」にも鎌倉を詠んだ三首が載せられており、このことから、当時の鎌倉が国の中央である奈良にも知られていたことがわかります。

しかし、鎌倉が京都と並んで政治、文化の中心地として誕生したのは、源頼朝が鎌倉を武府の地として定めて(1180年)からです。これから約150年の間、足利尊氏によって鎌倉幕府が滅ぼされるまで、鎌倉は日本における政治、経済、文化の集中する都市として繁栄していました。

北条氏の滅亡によって、政治、経済、文化の中心は京都へ移り、戦国乱世の時代の中では、小田原が関東の中心となりました。こうした中で、鎌倉は室町時代以後、明治時代に至るまで衰退の道をたどり、江戸時代には江戸に近い史跡名勝の地として、観光の対象となっていたようですが、往時のように繁栄することなく、静かな農漁村となっていました。

明治維新ののち、廃藩置県により、鎌倉は韮山県から神奈川県に所管となりました。その後、良好な海水浴場として鎌倉の海が広く紹介されたことや、明治22(1889)年2月の横須賀線開通、明治43(1910)年の江ノ電全線開通により、鎌倉は発展してきました。

大正になると温暖な気候、風光明媚な景観、波穏やかな海を有する鎌倉は、別荘の地、観光地として、多くの文人、文士が住み、観光客が訪れるようになりました。

昭和14(1939)年11月3日に鎌倉・腰越両町が区域を併せて市制を施行し、昭和23(1948)年1月1日に深沢村が、同年6月1日には大船町が合併され、現在の行政区画になり、人口は約84,000人となりました。

昭和30年代、40年代には、東京、横浜などの大都市のスプロール化が進む中で、鎌倉もその影響を受け、転入人口が急速に増大し、住宅都市としても大きな成長を遂げました。

しかし、昭和50年代のなかば以降、高度経済成長の終わりとともに鎌倉の人口増加も落ち着きを見せはじめ、昭和62(1987)年9月の176,489人をピークに減少傾向となり、平成18(2006)年4月1日現在、172,039人となっています。

現在でも豊かな歴史的遺産とそれを取り巻く豊かな山並み、谷戸、そして海岸線が鎌倉の自然景観をつくりだしており、首都圏のオアシスとして多くの観光客が訪れています。

【自然】

本市は、神奈川県南東部に、また三浦半島の基部に当たり、市域面積39.53km²で、風致に富む緑豊かな丘陵と相模湾を望む美しい海岸線を有しています。

また、表日本型の気候に属し、気温較差も比較的少なく温暖良好な気候です。